《研究ノート》

『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿

―― 第六帖（17）椎～山萵苣 ――

福田智子

本稿は、「『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖（9）芹～青葛―」（『社会科学』第四十三巻第四号〈通巻一〇一号〉、二〇一四年二月）、「『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖（10）朝顔～葵―」（『社会科学』第四十四巻第四号〈通巻一〇五号〉、二〇一五年二月）、「『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖（11）酢漿草～苔―」（『社会科学』第四十五巻第一・二号〈通巻一〇六号〉、二〇一五年八月）、「『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖（12）蝉～鈴虫―」（『文化情報学』第十一巻第一号〈通巻一四号〉、二〇一五年一一月）、「『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖（13）蛍～蝶―」（『社会科学』第四十七巻第一号〈通巻一一三号〉、「『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖（14）木～紅葉―」（『文化情報学』第十二巻第二号〈通巻一七号〉、二〇一七年三月）、「『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖（15）檀～紅梅―」（『社会科学』第四十七巻第二号〔通巻一一四号〕、二〇一七年九月）、「『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖（16）柳～橘―」（『文化情報学』第十三巻第一、二号合併号〈通巻一八号〉二〇一八年三月）の続編として、『古今和歌六帖』第六帖の「椎」から「山萵苣」までの題に配されている出典未詳歌、十首について注釈を施し、表現のあり方を考察したものである。これまで同様、底本には書陵部蔵桂宮本（『新編国歌大観』の底本）を用い、江戸期の流布本である寛文九年（一六六九）版本を含めた九本の伝本の本文異同を視野に入れる。凡例は、『社会科学』第四十三巻第四号に詳述しているので、その概略を記すにとどめる。なお、巻末には、別出一覧を示す。椎～さねき題の歌（四二六一～四三二八番）を対象とする。これについての凡例も、前稿を参照されたい。

凡例

一、底本は、宮内庁書陵部蔵桂宮本を用いる。

二、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は原則として示さず、語の異なりのみを示すが、和歌の解釈上、重要と思われる表記の異同は、必要に応じて適宜示す。諸本とその略称は次のとおり。

○永青文庫蔵北岡文庫本　略称（永）

○島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫本　略称（松）

○内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本　略称（和）
○内閣文庫蔵林羅山旧蔵本　略称（羅）
○神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本　略称（林）
○神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本　略称（宮）
○田林義信氏旧蔵本　略称（田）
○ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本　略称（黒）
○寛文九年版本　略称（寛）

三、和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。

注釈

四二六三（しひ）

【本文】

我がやどにきみこししひのなかたえてつみのむくいやあひみざるらん

【校異】○むくひ―むくゐ（林）

【語釈】○きみこし　「きみ」は、敬愛の意をもって相手をさす語。「こし」は、動詞「来（く）」の未然形に過去の助動詞「き」の連体形が付いたもの。「きみやこし我や行きけむおもほえず夢かうつつかねてかさめてか」（古今集・恋三・よみ人しらず・業平朝臣の伊勢のくににまかりたりける時、斎宮なりける人にいとみそかにあひて又のあしたに人やるすべなくて思ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりける）。　○しひのなか　強引に結ばれた夫婦の仲。「強ひ」に「椎」を隠す。椎の実は食用となる。食べられる実が生る植物名を物名として詠んだ歌には、「あぢきなしなげきなつめそうき事にあひくるみをばすてぬものから」（古今集・物名・四五五・兵衛・なし、なつめ、くるみ）がある。　○つみのむくい　「つみ」は罪。また「柘」（山桑）を掛け、「柘枝伝」の内容を踏まえるか（〔考察〕参照）。柘の実も椎と同じく食用になる。「むくい」は、ある行為の結果として身にはね返ってくる事柄。　○あひみざるらん　「あひみる」は、男女が逢う、契りを結ぶ意。「おもひやるこころは空にあるものをなどか雲ゐにあひみざるらん」（朱雀院御集・七・女御しもにさぶらひけるころ、給はせける／御返し）。

【通釈】私の家にあなたがやって来た、無理やり結んだ仲は途絶えて、罪の報いなのか、あなたに逢うことがない。

【他出】

『源氏物語古注釈書引用和歌』（4）河海抄、一八四七番

椎本

我がやどときみこししひのなかたえてつみのむくいやあひみざるらん

【考察】

はじめは強引に言い寄られた仲であっても、逢瀬を持った後には恋情はまさっていくが、そのうち交際が途絶えて、今はもう逢う機会がないのは「罪の報い」なのかと、相手と離れていることを悲しみ、再びの逢瀬を求める心情を詠んだ歌と見た。「罪の報い」が具体的にどのような内容を指すのかは解しがたいが、ここでは、「罪　柘ヲカヌ」と記す『古今和歌六帖標注』を参考に、「柘枝伝」を念頭に置いた解釈を試みる。

「柘枝伝」は、『万葉集』（巻三・三八八・三八五）の左注にその名が見出される。作品の全体像を知る資料は乏しいが、吉野川の梁にかかった柘の枝が美女と化し、梁をかけた漁師と結婚するも、後に昇天したという天の羽衣説話の型をもつと考えられている。そうすると、当該歌は、思わぬ相手と契りを結んだが、そのうちに仲が絶え、逢えなくなったのは、「柘」の枝を手にして不相応の相手と契りを結んだ「罪」によってなのかと、相手の心変わりを咎めた歌と見ることも、あるいは可能であろうか。「柘枝伝」をそのまま踏まえたとすれば男性の立場の詠ということになるが、平安朝の通い婚という風俗を背景に考えれば、逆に、男性の訪れを待つ女性の歌と捉えるのが穏当であろう。とはいえ、当該歌の「しひのなか」「つみのむくい」が具体的にどのような意をもつのかは、にわかに決し難い。後考を俟つ。

和歌における「強ひ」の例には、『万葉集』巻三の「否と言へど強ふる志斐（しひ）のが強ひ語りこのころ聞かずて朕恋ひにけり」（二三七・二三六・天皇、志斐嫗に賜ふ御歌一首）、「否と言へど語れ語れと詔らせこそ志斐いは奏せ強ひ語りと言ふ」（二三八・二三七・志斐嫗が和へ奉る歌一首）の贈答歌がある。ここでは、「志斐嫗」という人物呼称をきっかけに、同音反復で「強ふる」「強ひ語り」の語が用いられる。また、平安期には、「あはれとも思ふや君は年をへてつらきをしひて頼む我をば」（清慎公集・四七・女に）という例がある。「椎」そのものを詠んだ歌には、「はしたかのとがへる山のしひのえのときはにかれぬ中とたのまむ」（恵慶法師集・二八九・ひのえ）、「みやまにはやまのあらしあらげなりしひのかざをれいくそかかれり」（好忠集・三四二・くれの冬　十二月はじめ）があるが、用例は少ない。

「なかたえて」という句は、「わすらるる身をうぢばしの中たえて人もかよはぬ年ぞへにける」（古今集・恋五・八二五・よみ人しらず・題しらず・又は、こなたかなたに人もかよはず）、「中たえてくる人もなきかづらきのくめぢのはしはいまもあやふし」（後撰集・恋五・九八六・かれにけるをとこの、思ひいでてまできて、物などいひてかへりて／返し）などがあり、勅撰集では古今集から用例が見出される。私家集には、「なかたえてあ

またのとしになりぬればいまはかひなしみをぞうらむる」（元真集・三〇一）といった例がある。

「むくい」の語は、「われを思ふ人をおもはぬむくいにやわが思ふ人の我をおもはぬ」（古今集・雑体・誹諧歌・一〇四一・よみ人しらず・題しらず）、「思ひけむ人をぞともにおもはましまさしやむくいなかりけりやは」（古今集・雑体・誹諧歌・一〇四二・一本、ふかやぶ・題しらず）といった古今集歌をはじめ、「よとともにひとをわすれぬむくいこそけふはうれしくあひもそむらめ」（躬恒集・八三・ざふのうた）にも見出される。だが、「つみのむくい」の用例はごく少なく、平安中期には、「その中にありしにもあらずなれるみをしらばや何のつみのむくいと」（和泉式部集・七一七・おやはらからなど、おなじ所にはかにほかほかになりて後、たふときことするにいひやる）を見出すに過ぎない。その後は、「つくりけるつみのむくいのわびつつもこのよばかりにかぎらましかば」（一品経和歌懐紙解・一六・述懐）の他、『拾玉集』に三首見られることに注意される。また、「たきのうへのあせみの花のあせ水にながれてくいよつみのむくひを」（新撰六帖・第六・二五二二・為家・あせみ）は、六帖題で詠まれた歌であるだけに、結句を当該歌に拠った可能性があろう。

四二七八（すぎ）

【本文】

わすれずはたづねもしてんみわの山しるしにうゑし杉はなくとも

【校異】○わすれすは―わすれは（宮）

【語釈】○わすれずは　忘れないで。「ずは」は、打消の助動詞「ず」の連用形に係助詞「は」が付いたもの。ここは上代の語法で、連用中止法の「ず」に「は」が付いて、強調・提示の意を表す。「立ちしなふ君が姿を忘れずは世の限りにや恋ひ渡りなむ」（万葉集・巻二十・四四六五・四四四一）。　○みわの山　三輪山。奈良県桜井市北部にある山。山全体が、麓の大神神社の神体とされる。　○しるしにうゑし杉　神木として植えた杉。大神神社への道を探す目印となり、また、その枝を持ち帰ると御利益があるとされる。ここではとくに、「わがいほはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど」（古今集・雑下・九八二・よみ人しらず・題しらず）の歌と伝説にちなむ（〔考察〕参照）。

【通釈】（あなたのことを）忘れないで、きっと訪れもしよう。たとえ三輪の山の目印に植えた杉はないとしても。

【他出】なし

【考察】

たとえ目印などなくても、恋人のことを忘れることなく、必ずまた訪ねて来ようという歌である。平安期の風俗にあてはめるならば、女性のもとに通う男性の立場での詠と見られる。

三輪山の験の杉は、〔語釈〕に挙げた『古今集』九八二番歌に拠る表現である。この古今集歌は、当該歌が収められる『古今六帖』第六帖「すぎ」題の冒頭に配されるのみならず、第二帖「かど」題の冒頭（一三六四番）にも、「みわの御」の歌として載る。この『古今六帖』の作者名が記載された時期は不明というほかはないが、『古今集』では読み人知らずであるこの歌は、『俊頼髄脳』では三輪明神の詠と伝えられている。また同書には、杉を目印に三輪山を訪ねることを歌に詠む根拠となる説話として、いわゆる「苧環説話」を載せる。すなわち、毎夜、女のもとに通ってくる男の素性を怪しんで、糸を通した針を男の衣に刺し、翌朝その糸を目印にたどっていくと、男の正体が三輪明神であることがわかったというもので、古くは『古事記』にも見える神婚説話である。

『古今集』九八二番歌に拠って詠まれたと考えられる歌は、十世紀頃に散見される。「みわの山いかにまち見む年ふともたづぬる人もあらじと思へば」（古今集・恋五・七八〇・伊勢・仲平朝臣あひしりて侍りけるをかれ方になりにければ、ちちがやまとのかみに侍りけるもとへまかるとてよみてつかはしける）の他、古今集時代には、「いづれをかしるしと思はんみわの山みえとみゆるは杉にざりける」（貫之集・一四五・延喜二年五月中宮の御屏風の和歌廿六首／四月おほみわの祭のつかひ）、「いにしへのことならずしてみわの山こゆるしるしは杉にぞ有りける」（貫之集・二二六・延喜御時内裏御屏風のうた廿六首／大神のまつりにまうでたる）、「ゆきのうちにみゆるときははみわやまのやどのしるしのすぎにぞありける」（躬恒集・一五六・雪中のすぎのおなじおほせ）といった例がある。『躬恒集』歌は依頼による詠、また『貫之集』の二首は屏風歌で、専門歌人の詠歌素材として用いられている。とくに後者からは、四月の大神祭が屏風の図柄としてもある程度定着していたことがわかる。その一方で、先の『古今集』伊勢の歌や「すぎたてるみわのやまべは見しかどもとふてふ事はなき世なりけり」（延喜御集・一二・御返し）などの日常詠も見られる。

後撰集時代に入っても、「三輪の山しるしの杉は有りながらをしへぬ人はなくていく世ぞ」（元輔集・一三九三）、「とへといひし人はありやと雪分けて尋ねきつるぞみわの山本」（順集・二九・冬）といった当代を代表する歌人の詠が見られるが、注意すべきは、贈答歌の例であろう。『蜻蛉日記』下「わりなくもすぎたちにけるこころかなみわの山もとたづねはじめて」（一九二・た

いふ〈道綱〉)、「みわの山まちみることのゆゆしさにすぎたてりともえこそしらせね」(一九三・山とだつ人)の他、『斎宮女御集』の「かずならであづさのそまにたちぬともすぎのもとをばいつかわすれむ」(四七・そのはらからの少将、みやづかへすべしときかせ給ひて、さてすぎくれのとのたまはせたりければ、少将)「わすれじといふにもよらじみわのやますぎのもとにはあめもりにけり」(四八・御かへし)、『中務集』の「ちはやぶるみわのやまもとへにければこひしきひともあらじとぞおもふ」(一三六・山里にかよふ人あるやうにききて)「おとにのみありとはきけどみわの山すぎのおひたるかただにも見ず」(一三七・返事)、『円融院御集』の「松をのみひくべきやどときしよりはるのくるにもただならぬかな」(五〇・すけまさの宰相のむすめに、まつをきみなんあはすはべしときこしめして、つかはしける)、「うれたかきすぎにこころをかけそめてまつをひくべきみわの山かは」(五一・御かへし)といった例である。贈答歌の形式ではなくても、「みわの山このゆくすゑはいかなればところどころにすぎたてりけむ」(仲文集・六七・かよふみやづかへ人のさととひおきてたづねけれど、さらにえあはで、のちに、みわのやまもとときこえしはといへば)という歌もあり、古今集時代に比べ、より日常に根差した用例が目立つ。また、物語中にも、「いくたびかふみまどふらんみわの山すぎあるかどはみゆるものから」(宇津保物語・藤はらの君・六六・平中納言殿〈正明〉)という歌がある。なお、『元真集』の二首、「みわやまのしるしのすぎもかれはててなき世にわれぞきてたづねつる」(三一四)、「ゆきふればまづぞかなしきみわのやましるしのすぎの見えじとおもへば」(三一八)は、三輪山の験の杉がない、あるいは見えないことを詠んでおり、当該歌の下句の内容と相通じるものがある。

四二九一　(あふち)

【本文】

我がやどにあふちのはなはさきたれどなにしもおはぬ物にぞ有りける　(つらゆき)

【校異】○つらゆき―ナシ(松・羅・田)

【語釈】○あふちのはなはさきたれど　「あふち(楝・樗)」は、植物「せんだん(栴檀)」の古名。落葉高木で、初夏に淡紫色の花をつける。「花が咲く」は、比喩表現で、時節が到来し物事が成就する意を表す。「あふちの花が咲く」という表現は、当該歌に続く『古今六帖』四二九二番・四二九三番にも見え、恋人に逢える意をもつ。　○なにしもおはぬ　「名に負ふ」で、名前として持つ、実体どおりの名前をもつ意。「名にしおはばいざ事とはむ宮こどりわが思ふ人はありやなしやと」(古今集・羈旅・

四一一・在原業平朝臣）。「しも」は強意。

【通釈】私の家の庭に「あふち」の花は咲いたけれど、その名のとおり、恋人に「逢う」というわけにはいかないものなのだなあ。

【他出】なし

【考察】

「逢ふ」という名の「あふち」の花が庭に咲いたことで、自分も恋人に「逢ふ」ことができるかと思ったら、その機会がないのはいったいなぜなのかと、恋人に逢えないつらさを詠んだ歌である。「なにしおへばたのまれぞするわがこふるひとにあふちのはなさきにけり」（好忠集・一二八・夏中、五月はじめ）という発想が、当該歌の趣向のもとになっていよう。

名前のとおりにはいかない、単なる言葉の上だけのことであったという内容の歌は、夙に『万葉集』に、「言にしありけり」という表現で、「住吉に行くといふ道に昨日見し恋忘れ貝言にしありけり」（巻七・一一五三・一一四九）、「名草山言にしありけり我が恋ふる千重の一重も慰めなくに」（巻七・一二〇三・一二一三）などの例が見える。平安期以降は、「なにはおへどなれるもみえずうりふざかはるのかすみのたてるなるべし」（頼基集・一六・あるところの屏風のゑに、しがのやまごえのところ）といった、「名に負ふ」という表現を用いた例があるが、用例数としては少なく、「名にし負はば」「名にし負へば」などのかたちで、名前のとおりに願望が実現するという方向性をもって詠まれる場合が多いようである。

「あふち」は、『万葉集』に「玉に貫く楝を家に植ゑたらば山ほととぎす離れず来むかも」（巻十七・三九三二・三九一〇）、「ほととぎす楝の枝に行きて居ば花は散らむな玉と見るまで」（巻十七・三九三五・三九一三）の例があり、初夏の実景として時鳥と組み合わされる。またその花は、「妹が見し楝の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに」（巻五・八〇二・七九八）、「我妹子にあふちの花は散り過ぎず今咲けるごとありこせぬかも」（巻十・一九七七・一九七三）というように、「散る」のを惜しむところに詠歌の主眼がある。その点で当該歌や、次の『古今六帖』四二九二番・四二九三番歌は、万葉歌とは一線を画すであろう。

一方、『万葉集』の「我妹子にあふちの花」（一九七七・一九七三）は、「我妹子に逢ふ」と「あふちの花」との掛詞になっている。平安期に入ると、この万葉歌のような、植物名「あふち」に動詞「逢ふ」を見出した詠が主となる。すなわち、「うぐひすの来本の花とのみいふなればあふちどりをばすゑむともせず」（近江御息所歌合・五・あふち）は、植物「あふち」を詠み込んだ物名歌であり、また、「わびぬればさ月ぞをしきあふちて

ふ花の名をだにきくと思へば」（宇津保物語・まつりのつかひ・二四七・中納言殿〈正明〉）、「五月きぬことかたらはむほととぎす君にあふちの花も咲きけり」（四季恋三首歌合・一一）、「おいのよをいへばえなりやあやめぐさちよにあふちの花をこそみれ」（斎宮女御集・一二九・ためちかがはらからのためくに、かみなり、五月五日まゐりて、宮の御前のやり水をみかはのいけとなむいふなる、大ばん所にて／かへし、女御殿）は、いずれも「あふち」と「逢ふ」との掛詞である。当該歌も、これらの歌の表現の系譜に連なるものとして位置付けられよう。

四二九二（あふち）

【本文】

さみだれにこひすといふなはたたばたて君にあふちの花し咲きなば

【校異】○こひすと―こひす（松・羅・田）　○花し散（咲）なは―はなしさきなは（永）花し咲なは（松・和・羅・田・寛）花しさくなは（林）はなし咲なは（宮）花は咲けり（黒）

【語釈】○さみだれ　長雨が降り続く陰暦五月頃。梅雨の時期。「さ乱れ」（乱れて）の意を掛ける。　○こひす　恋をする。恋い慕う。　○君にあふちの花し咲きなば　恋人に「逢ふ」に「あふち」の花を掛ける。「咲きなば」は、咲いたらの意。「なば」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に接続助詞「ば」が付いたもの。動作が完了したときを予想し仮定する。「あふちの花が咲く」という表現については四二九一番〔語釈〕参照。なお、黒川本が本文を「咲けり」とするのは、次の四二九三番歌の結句との目移りか。黒川本では、四二九三番歌は欠落している。

【通釈】五月雨が降る頃に、心乱れて恋をしているという評判は、立つのなら立つがいい。あなたに「逢う」という名の「あふち」の花が咲いたら。

【他出】なし

【考察】

「あふち」の花が咲く五月雨の頃という季節感を背景に、恋人に「逢ふ」という語と「あふち」の花との掛詞を契機として、心を乱して恋をしているという評判が立ったとしても、実際に恋人に逢えるのならばそれでよい、という開き直った恋心を詠んだ歌である。

「こひすといふ（てふ）な」という表現は、「色にいでて恋すてふ名ぞたちぬべき涙にそむる袖のこければ」（後撰集・恋一・五八〇・よみ人しらず・人につかはしける）、「こひすてふわがなはまだきたちにけり人しれずこそ思ひそめしか」（天徳四年内裏歌合・四〇・忠見・廿番　左）、「恋すてふ名は高砂にたちぬれど尾上のまつといふ人のなき」（匡衡集・一〇一・又、女に）

などの歌に見られる。本来、恋をしているという評判が立つのは好ましくないものであるが、当該歌は、『古今六帖』四二九一番・四二九三番と同様に、男女が逢瀬をもつ意を「あふちの花が咲く」と表現していると見られ、それが実現するなら評判が立つのは厭わない、と詠んでいる。

第三句「たたばたて」の用例は、「ひとめをもいまはつつまじはるがすみのにもやまにもなはたたばたて」（躬恒集・二〇一・ざふ）、「われがなは花ぬす人とたたばたてただ一枝はをりてかへらむ」（和泉式部・九八・いづれのみやにかおはしけむ、白河院まろもろともにおはして、かくかきていへもりにとらせておはしぬ、公任集・二九・そちの宮花みにしら川におはして）などが挙げられる。とくに『躬恒集』歌は、当該歌と同様に「名」が立つことを詠んでいる点で共通する。

「君にあふちの花」という表現には、「五月きぬことかたらはむほととぎす君にあふちの花も咲きけり」（四季恋三首歌合・一一）の他、さらに時代が下って、「われも又昨の木とて身をすてば君にあふちの花にさかじを」（耕雲千首・二四六・夏百首／樗）という例もあるが、先の四二九一番〔考察〕で挙げた万葉歌の「我妹子にあふちの花」の表現の系譜に属するであろう。なお、「人にあふちの花」の例が、次の『古今六帖』四二九三番歌に見える。

「さみだれ」と「あふち（の花）」の組み合わせは、『新編国歌大観』による限り、当該歌の他、次の『古今六帖』四二九三番歌を嚆矢とする。その後は、「あふちさくそとものこかげ露おちて五月雨はるる風わたるなり」（新古今集・夏・二三四・前大納言忠良・百首歌たてまつりし時）という歌があるが、用例は多くない。

四二九三（あふち）

【本文】

さみだれとことなしびつる時しもぞ人にあふちの花は咲きける

【校異】○和歌本文欠（黒）　○ことなしひつる―ことならひつる（永）ことなしひへる（田）　○咲ける―さきけり（宮）

【語釈】○ことなしびつる　「ことなしぶ」は、何でもないふりをする、知らないふりをするの意。　○時しもぞ　「しも」「ぞ」で重ねて「時」を強く限定する。折も折。　○人にあふちの花は咲きける　恋人に「逢ふ」に「あふち」の花を掛ける。「あふちの花が咲く」という表現については四二九一番〔語釈〕参照。

【通釈】五月雨が降る頃になったと、何げないふりをする折も折、人に「逢う」という名の「あふち」の花は咲き、恋人に逢ったのだな。

【他出】なし

【考察】

五月雨の頃、何げない様子にしていたが、実はまさにその時に、「あふちの花」が咲いた―恋人との逢瀬を持った―のだ、という状況を詠んだ歌であろう。

「ことなしぶ」という語は、あまり和歌に用いられる語ではない。「むらどりのたちにしわが名今更にことなしぶともしるしあらめや」（古今集・恋三・六七四・よみ人しらず・題しらず）という例はあるが、その後は、「忘れじとたてしちかひを今更にことなしぶとも神もゆるすな」（千二集・一五〇八・逢不遇恋）以下、わずかな例を見出す程度である。

なお、「……しもぞ……ける」という言い回しは、『万葉集』には見当たらないが、『古今集』に「あをやぎのいとよりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける」（春上・二六・つらゆき・歌たてまつれとおほせられし時によみてたてまつれる）という歌がある他、後撰集時代にも、「おいぬとて春をばをしむころしもぞよろづの花はさかりなりける」（宇津保物語・国ゆづりの下・九四七・右衛門督）、「をぎのはにかぜのそよめく夏しもぞあきならねどもあはれなりける」（好忠集・七一・六月中）といった例を見出す。平安期に入ってからの表現と見られよう。

なお、黒川本が当該歌を欠くことについては、四二九二番〔語釈〕参照。

四三〇七（ながめがしは）

【本文】

人こふるながめがしはは(く)ふるさとのうきねにのみぞしげくみえける

【校異】○なかめかしはゝ―なかめかしはゝ（永・松・和・羅・宮・田・黒・寛）なかめかしはは（林）

【語釈】○ながめがしは　長女柏。カシワの一種で、特に芽が長く出るものか。「長女柏　一筥」（延喜式・七・神祇・践祚大嘗祭）。「眺め」（物思いにふける意）を掛ける。　○ふるさと　昔馴染みの土地。荒廃したイメージをもつ。　○うきね　憂き寝。つらい独り寝。「浮き根」（地表に現れた根）を掛ける。なお、『夫木抄』『和歌童蒙抄』では、本文を「かきね」とする（〔考察〕参照）。　○しげくみえける　「しげく」は「繁し」で、長女柏の根が多い意に、つらい独り寝が度重なる意を重ねる。「うきね」「しげく」は「ながめがしは」の縁語。

【通釈】人を恋い慕って物思いに沈む様子は、長女柏が昔馴染みの土地で地表に根を現し多く繁って見えるように、馴染みの場所でのつらい独り寝だけが度重なって見えることよ。

【他出】

『夫木抄』巻第二十九、一三九七三番

ながめがしは、六六　　読人不知

人こふるながめがしはは古里のかきねにのみぞしげくみえける

『和歌童蒙抄』第七、木部、七一五番

柏

ひとこふるながめがしははふるさとのかきねにのみぞしげくさきける

【考察】

「ながめ柏」の「浮き根」が「繁く」見えたという表現に、恋による「眺め」によって「憂き寝」が「繁く」なったという意を重ね、人を恋い慕うつらさを詠んだ歌である。

「ながめがしは」は、『斎宮女御集』の二組の贈答歌に用例を見出す。すなわち、「あふことのはるかなるにもありしよをおもひいでつつながめがしはぞ」（二〇八・ながめがしはをつかはすとて）、「よとともにしのぶのつゆもあるものをこやをりをりのながめがしはか」（二〇九・おほむかへり）、「さだめなきよをきくときもたれによりながめがしはのしげきとかしる」（二二六・ほりかはの中宮うせ給ひてのころ、六条殿にながめがしはをたてまつり給ひて）、「さだめなきつゆもわがみもよそふなるながめがしはにかかるつきかな」（二二七・御かへし）である。いずれも、実際に「ながめ柏」が贈答品として用いられており、当時の貴族たちにとって身近な植物だったことがわかる。だが、平安期の和歌の例としては、他に「山守よなげきといへばふししばもながめがしはもわきてやはこる」（俊忠集・五二・題可尋）を見出すに過ぎない。

その後、まとまった数の用例が見出されるのは、『新撰六帖』第六帖「ながめがしは」題の歌である。「身にしめどふくころほひのあらしかなあきの夕べのながめがしはに」（二四八六・家良）、「もろくちるころぞかなしき山もとのながめがしはのながめながめて」（二四八七・為家）、「雲もはれぬながめがしはのした露はをやみなくこそ袖ぬらしけれ」（二四八八・知家）、「あめやまぬふるからをののをちかたにながめがしはも名にしおふらし」（二四八九・信実）、「いたづらにながめがしはの名にたてたのむこととはけふもくらしつ」（二四九〇・光俊）の五首は、いずれも「ながめ（長女／眺め）」を用いているという点では、『古今六帖』の当該歌と軌を一にするが、『古今六帖』に「ながめがしは」題で一首のみ収められている当該歌をとくに踏まえて詠まれたと考えられる歌は見当たらない。

「ながめ」「ふるさと」の組み合わせは、「ひとりのみながめてとしをふるさとのあれたるさまをいかに見るらむ」（後撰集・雑一・一一一九・あつみのみこ・京極のみやす所、尼になりて戒うけんとて、仁和寺にわたりて侍りければ）の他、「ながめつつあめもなみだもふるさとのむぐらのかどはいでがたきかな」（斎

宮女御集・一一四・また、しはすのつごもりに、いとあはれなるところになどかくのみはながめたまふと、きこえたまふ御返に)、「見なれつる名残恋しき故郷に春のながめにきてもとはなん」(明王院旧蔵本定頼集・八七・返りて又の日、雨のいとのどかにふるに、もろともなりし人のもとに)、「秋ふかくなり行くままに時雨のみふるさと人はながめをぞする」(明王院旧蔵本定頼集・一二六・九月十日のほどに、人のもとよりかくいへる)などがあるが、用例数としては意外と少ない。

また、「ふるさと」「うきね」をともに詠んだ平安期の例は、わずかに「ふるさとにありとは人にしらるれど涙にのみぞうきねせらるる」(宇津保物語・国ゆづりの中・八八〇・中納言〈実忠〉)を見出すのみである。なお、『夫木抄』『和歌童蒙抄』は「うきね」を「かきね」として、「ふるさとのかきね」という本文をとる。用例としては、「うのはなのさけるあたりはときならぬゆきふるさとのかきねとぞみる」(能宣集・二六六・うのはな)、「ふる郷の垣ねにのみぞわれはなくしでのたをさはとぶらひもせず」(和泉式部集・四八九・同じ僧都の母の許に、こ内侍ともこどもにうの花みしことなど、いひやりたれば／かへし)などがあり、卯の花について詠むことが多いようである。「ふるさとのうきね」に比して類型性が看取されることから、「ふるさとのかきね」はそういった表現類型に引かれて後に生じた本文と想定し得る。

四三〇八（つつじ）

【本文】

玉もかるおほくのうらのうら風につつ(ゝ)じのはなはちりぬらんかも

【校異】○おほくのうら―おほえの浦（田）

【語釈】○玉もかる　美しい藻を刈る。「おほくのうら」に付く枕詞と見ることもできようが、ここでは海辺の実景と解した。○おほくのうら　邑久の浦。岡山県南東部、瀬戸内市牛窓町あたりの錦海湾南岸に位置する入江。「邑久　於保久」（二十巻本和名抄・五・備前国）（〔考察〕参照）。「邑久」に「多く」を掛け、結句を修飾するか。　○うら風　浦に吹く風。海辺を吹く風。　○つつじ　ツツジ科ツツジ属の低木のうち、全部もしくは一部が落葉するもの。晩春から初夏にかけて、枝先に漏斗状の朱色の花が数個集まって咲く。　○ちりぬらむかも　散ったことだろうなあ。「ぬらん」は完了の助動詞「ぬ」の終止形に推量の助動詞「らむ」が付いたもの。「かも」は万葉語で詠嘆を表す。「あしびきの山べをてらす桜花この春雨にちりぬらんかも」（玉葉集・春下・二二八・読人しらず・題しらず）。なお、『歌枕名寄』は結句を「ちりぬべらなり」とする。「べらなり」は、推

量の助動詞で、……のようである、……しそうな様子であるの意。平安期に入り用いられるようになる。なお、『夫木抄』は結句を「咲きぬらんかも」とするが、「うら風」には花が散るという意の方が適当であろう。

【通釈】美しい藻を刈る邑久の浦に吹く風によって、躑躅の花はほとんど散ってしまっていることだろうなあ。

【他出】

『夫木抄』巻第六春部六、二二〇〇番

（躑躅）

同（題しらず）、六六　　同（読人不知）

玉藻かるおほえの浦の浦風につつじの花は咲きぬらんかも

『歌枕名寄』巻第十六畿内部十六摂津国四、四四五〇番

（渡辺大江岸　浦　橋）

浦

六帖

玉もかる大江のうらのうらかぜにつつじの花はちりぬべらなり

【考察】

玉藻を刈り取る邑久の浦に思いを馳せ、かつて色鮮やかに咲いていた躑躅の花も、今頃は浦風に散ってしまっているだろうと推量した歌であろう。和歌には珍しい地名「邑久」を詠んだのは、「多く」を掛けるためか。とすれば、「多くの浦」と見て、「玉藻を刈る数多くの浦の中でも、とくに邑久の浦では」の意を汲むべきかとも考えられるが、ここでは、「きながらぞとるべかりけるさくらばなをるまにおほくちりにけるかな」（忠見集・九九・ひとのこの、さくらのをりたるえだをもたるをみて）に見えるように、躑躅の花が「多く（ほとんど）」散ってしまった情景と見た。

「玉もかる」という句が地名に直接続く例は『万葉集』にある。「玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島の崎に舟近付きぬ」（巻三・二五一・二五〇）、「玉藻刈る辛荷の島に島回する鵜にしもあれや家思はざらむ」（巻六・九四八・九四三）という歌が見える。当該歌は、これらの万葉歌と、句の位置も同じである。

「おほくのうら（邑久の浦）」は、和歌にはまず詠まれない地名であるが、『続日本紀』天平十五年（七四三）五月丙寅の条に、「邑久郡新羅邑久浦に大魚五十二隻漂着す。」と見え、その存在が知られる。なお、田林義信氏旧蔵本、および『夫木抄』『歌枕名寄』では「大江（おほえ）の浦」とする。これは、『歌枕名寄』が明示するように、当該歌を摂津国の歌枕「渡辺大江」と認識したものであろう。「渡辺大江」の用例には、「わたのべやおほえのきしにやどりしてくもゐにみゆるいこま山かな」（後拾遺集・羈旅・五一三・良暹法師・つのくににくだりてはべりけ

るに旅宿遠望心をよみ侍ける）がある。和歌では馴染みのない「邑久の浦」が、たとえば「く（久）」と「え（衣）」の仮名字形の類似による誤写によって、後世、より知られている歌枕「大江の浦」として伝わったことが想定される。

「うらのうら風」の平安期の例は、今のところ当該歌の他に、「心あるありまの浦のうら風はわきて木の葉も残す有りけり」（増基法師集・二四・夕日に色まさりて、いみじうをかし）を見出すのみである。ただし、「うら（浦）風」ならば、「あふみのやしがのうらかぜうらめしくたづねきたれどかひなかりけり」（伊勢集・三九五）、「朝日さすかたのうらかぜいまだにも身のうらさむきこほりとけなむ」（貫之集・三二・立春日宰相中将師輔の君の御もとにたてまつる、つかさうつりけむとてなり、おほきおとどにたてまつり給ひてけり）のように、同音の「うらめし」「うらさむし」の語を用いる例の他、「身のうきにおもひもあかじうら風にあまのなげきはいつかたゆべき」（元真集・三〇八）がある。なお、勅撰集における初出は『拾遺集』の「さざなみやしがのうら風いかばかり心の内の涼しかるらん」（哀傷・一三三六・右衛門督公任・少納言藤原統理に年ごろちぎること侍りけるを、志賀にて出家し侍るとききていひつかはしける）で、『古今集』『後撰集』に用例は見当たらない。

「つつじ（の）はな」は、『万葉集』に用例が多く見出される。「茵花」（巻三・四四六・四四三、巻十三・三三一九・三三〇五）、「都追慈花」（巻十三・三三二三・三三〇九）という表記で、花の色の鮮やかさ、女性の顔のあでやかな美しさから、「にほふ」に付く枕詞として用いられた例もある。だが、当該歌の先行例としては、現代の新訓では「あしび」とされる「馬酔（木）」の西本願寺本の訓「ツツジ」に拠って、「かはづ鳴く吉野の川の瀧の上の馬酔（ツツジ）の花そはしに置くなゆめ」（万葉集・巻十・一八七二・一八六八）、「我が背子に我が恋ふらくは奥山の馬酔花（ツツジノハナ）の今盛りなり」（万葉集・巻十・一九〇七・一九〇三）、「春山の馬酔花（ツツジノハナ）の悪しからぬ君にはしゑや寄そるともよし」（万葉集・巻十・一九三〇・一九二六）、「……本辺には　馬酔木（ツツジ）花咲き　末辺には　椿花咲く……」（万葉集・巻十三・三二三六・三二二二）といった歌を指摘すべきであろう。また、西本願寺本の訓に拠る「ツツジ」の例としては、他にも、「磯の上に生ふる馬酔木（ツツジ）を手折らめど見すべき君がありといはなくに」（万葉集・巻二・一六六・一六六）、「……山も狭に　咲ける馬酔木（ツツジ）の悪しからぬ　君をいつしか　行きてはや見む」（万葉集・巻八・一四三二・一四二八）がある。

四三一〇（いはつつじ）

【本文】

たきばしるをしひのやまのいはつつじいはまを分けていやめづらしに

【校異】○をしほ―をしひ（永・松・和・羅・林・宮・田・黒・寛）　○いはま―岩□（一字分空白）（田）　○めつらしに―めつらかに（松・和・羅・宮・田・黒・寛）めくらかに（林）

【語釈】○たきばしる　滝走る。滝が激しい勢いで流れる。　○をしひのやま　未詳。『古今和歌六帖標注』も「未勘」とする。『平安和歌歌枕地名索引』（ひめまつの会、大学堂書店、昭和四十七年二月）は、桂宮本の見セ消チ傍書前の本行本文「をしほ」を採る。また、『夫木抄』は「おとはの山」で、「大原ノ」の異文傍書をもつ。「をしほ（小塩）」「おとは（音羽）」「大原」は、いずれも歌枕である。なお、「をしひ」本文を採るならば、「火」を掛けるか。　○いはつつじ　石や岩のほとりに生える躑躅。同音反復で「いはま（岩間）」を導く。　○いはま　岩間。岩と岩との間。岩の割れ目。　○いやめづらしに　「いや」は、状態を表す語に付いて、程度がはなはだしいさまを表す。いちだんと。きわめて。「めづらし」は、賞美する価値がある、すばらしいの意。

【通釈】滝が激しく流れる「をしひ」の山の岩躑躅は、岩の間を分けて、火が燃えるようにますますすばらしく赤く鮮やかに咲いていて。

【他出】

『夫木抄』巻第六春部六、二二四〇番

つつじ、六六　　読人不知

滝はしるおとはの山（大原ノイニ）の岩つつじいは間をわけていやめづらしき

【考察】

「火」という名をもつ「をしひ」の山に激しく流れる滝のしぶきの白を背景として、辺りの岩と岩の境目に咲く岩躑躅の花の燃えるような赤の美しさを見出した歌と見た。

「たきばしる」の和歌における用例は、『新編国歌大観』を検する限り、他には「花にさへ身を惜むとや滝ばしる岩もと桜を見る人もなし」（林葉累塵集・春下・一七五・長従・題しらず）という後世の例を見出すのみである。あるいは、「石走る瀧もとどろに鳴く蝉の声をし聞けば都し思ほゆ」（万葉集・巻十五・三六三九・三六一七・安芸国の長門の島にして磯辺に船泊まりして作る歌五首）、「石ばしるたきなくもがな桜花たをりてもこむ見ぬ人のため」（古今集・春上・五四・よみ人しらず・題しらず）などの「石走る瀧」という表現から派生したか。

「いはつつじ」に同音反復で「いは……」と続ける歌は、『万

葉集』にはないが、平安期に入ると、「思ひいづるときはの山のいはつつじいはねばこそあれこひしきものを」（古今集・恋一・四九五・読人しらず・題しらず）の他、「わすれにし常盤の山の岩つつじいはねどわれに恋はまさらじ」（落窪物語・四七・落窪の君）、「いはつつじいはねばうとしかけていへばもの思ひまさる物をこそ思へ」（和泉式部集・六九八・人しれずおもふ事あるを、はらからにかくなむいふとて）など、動詞「言ふ」の未然形の例が目立つ。また、「いはま……」と続く歌には、「やましろのいはたのをかのいはつつじいはまくほしきはなのいろかな」（江帥集・四九・春／つつじ）があるが、この例も動詞「言ふ」に続く例である。当該歌のように「岩間」に続く例は、意外と見当たらない。「岩つつじ」に、語素の同じ「岩間」と続けるよりも、品詞の異なる語に繋ぐ趣向を、平安和歌は志向したのであろう。

「いはまを分（けて）」という表現は、「やみがくれいはまを分けて行く水の声さへ花の香にぞしみぬる」（紀師匠曲水宴和歌・一・躬恒・花浮春水）、「たに河の岩まを分けて行く水の音にのみやはききわたるべき」（兼盛集・二七・いかでとおもふ人に）、「山河のいはまをわくとささらめく水もこほればおとづれぬかな」（重之女集・六四・冬廿）、「消えはてぬゆきかとぞみる谷川のいはまをわける水のしら波」（赤染衛門集・四八八・二月にくらまにまうでしに、いはまの水のしろくわきかへりたるが、雪のやうに見えしに）、「わきかへり岩間をわくる滝の糸の乱れて落つる音高きかな」（栄花物語・歌合・三八一・伊予の中納言の君）といった歌に見られ、水の流れについていうことが多い。当該歌はそこに、躑躅の花の赤を見出している。

「いはつつじ」の色は、「うすくこくのもせにさけるいはつつじはるのにしきとみえわたるかな」（六条斎院歌合・八・いでは・右かつ）という例もあるが、むしろ、「やまひめのそめてはさぼすころもかと見るまでにほふいはつつじかな」（好忠集・七九・三月中）、「岩つつじをりもてぞみるせこがきし紅ぞめの衣ににたれば」（和泉式部集・一九・春）、「さほ姫のみな紅にいはつつじもえぬばかりも染めてけるかな」（備中守定綱朝臣家歌合・二八・五節君・右勝）というように、深い紅（赤）を賞美することが多い。当該歌が「いやめづらしに」と詠む岩躑躅の美的要素については具体的に示されないが、前述のように、「をしひの山」に燃える「火」を掛けるとすれば、滝のしぶきの「白」との対比は、より明確に読み取れるであろう。

「いやめづらしに」の他例は未見である。だが、「人ごとに折りかざしつつ遊べどもいやめづらしき梅の花かも」（万葉集・巻五・八三二・八二八）、「時ごとにいやめづらしく咲く花を折りも折らずも見らくし良しも」（万葉集・巻十九・四一九一・

四一六七)、「時の花いやめづらしもかくしこそ見し明らめめ秋立つごとに」(万葉集・巻二十・四五〇九・四四八五・右、大伴宿祢家持作る)などの例から推すと、万葉由来の表現であろう。なお、『古今六帖』諸本中、「いやめづらかに」という本文をもつ伝本も少なくないが、『新編国歌大観』の他、『新編私家集大成』にも用例は見当たらない。もっとも、『日本国語大辞典』(第二版)は、「いや-めずらか[‥めづらか]」の項目を立て、「信頼卿の寵愛も、猶いやめづらかにして、かたをならぶる人もなし」(平治物語・上・信頼、信西不快の事)の例を挙げる。とすれば、当該歌の異文は、和歌には通常用いられない、このような言い回しが、書写の過程で入り込んだものか。

四三一七(はたつもり)

【本文】

わがこひはみやまにおふるはたつもりつもりにけらしあふよしもなし

【校異】○(題)はたつもり—はつもり(黒)

【語釈】○みやま　深山。山の奥深いところ。　○はたつもり　畑つ守。植物「りょうぶ(令法)」の異名。若葉は食用になる。同音で「積もり」を導く。　○つもりにけらし　「積もり」は「積もる」で、重なって量が増える、溜まる意。

【通釈】私の恋は、深山に生える「畑つ守」ではないが、募ってきたようだ。(それなのに、)逢う手段もない。

【他出】なし

【考察】

心深くに収めた恋情を「深山」の語で暗示し、「はたつもり」という植物名を用いて、同音で「つもり(にけらし)」を導き、恋人に逢う手段を持たない自らの恋の重なる鬱屈を詠んだ歌である。

「はたつもり」の用例は、当該歌がごく初期のものであろう。その後、「いまよりはみ山がくれのはたつもり我がうちはらふとこのなれや」(能因法師集・七五・はやう見し人の令法といふものを一枝おこせたるに、かういひやる)の例では、「はたつもり」が「令法」の異名であることが明示されている。その他、「おく山のくきがくれなるはたつもりしられぬ恋にかよふころかな」(永久百首・四二四・俊頼・忍恋)があるが、注目すべきは、六帖題で詠まれた『新撰六帖』の第六帖「はたつもり」題の歌で、「里人やわか葉つむらんはたつもりとやまも今は春めきにけり」(二五一一・家良)、「しられぬにかさなる山のはたつもりはたつもり行くつみぞかなしき」(二五一二・為家)、「今よりはこのめも春のはたつもりときにけりと人やたづねん」(二五一三・知家)、「はたつもりつもりし雪もきえぬればしづが

すさびにわか葉つむらし」（二五一四・信実）、「ねやいらぬと山のはるのはたつもり葉にのみいでて人にしらるる」（二五一五・光俊）の五首の用例が見える。このうち為家・信実の歌は、「はたつもり」が同音反復で次の語を導いており、『古今六帖』の当該歌の用法と軌を一にする。とくに信実の「はたつもりつもり～」という表現は、当該歌と同じである。

四三二四（山ちさ）

【本文】

わがごとく人めまれらにおもふらししら雲ふかくやまぢ（山路）さの花

【校異】○まれらに―まれしに（和・宮）　○ふかく―ふかく（宮）

深き（黒）ふかき（寛）　○山路さ―やまちさ（永・宮）山ちさ（松・和・羅・林・田・黒・寛）

【語釈】○まれら　稀ら。物の数や度数などが少ないさま。「ら」は接尾辞。　○やまちさの花　山萵苣の花。萵苣は、えごの木の異名。各地の山野に生える落葉高木。初夏には、漏斗状で深く五つに裂けた花冠の二・五センチメートルほどの白い花が、柄の先に垂れ下がって咲く。

【通釈】（訪れる人がいない）私と同じように、人目は稀であると思っているらしい。白雲が深くて。山に咲く萵苣の花は。

【他出】なし

【考察】

見に来る人もいないまま、山に掛かる白雲に隠れて白い花を咲かせる山萵苣の花を、誰も訪れる人のいない孤独な自分に重ねて詠んだ歌である。

「わがごとく」という句には、「わがごとく物やかなしき郭公時ぞともなくよただなくらむ」（古今集・恋二・五七八・としゆきの朝臣・題しらず）、「わがごとく物やかなしききりぎりす草のやどりにこゑたえずなく」（後撰集・秋上・二五八・つらゆき・題しらず）、「わがごとくものおもふべしきりぎりすぬともきこえでよもすがらなく」（安法法師集・一二・きりぎりす）など、悲しみや物思いを鳥や虫に重ねて詠む例が目立つ。「わがごとく物思ひけらししらつゆのよをいたづらにおきあかしつつ」（後撰集・秋下・四二四・よみ人しらず・題しらず）は、「置き／起き」の掛詞により、自らの物思いを「露」に重ねた例である。また、「わがごとく人めやはもるなにしかはよなよなこひのねをばなくらむ」（書陵部本能宣集・三一七・おなじみちに、しかの、はぎのはなのなかになくを）は、「人目をはばかる」という点で、自分と鹿とを重ねる。当該歌は、「人目が稀である」という点で山萵苣と自分との共通点を見出しているが、植物を対象とした詠は比較的珍しい。

「まれら」の例は、『万葉集』には見当たらないが、「天河よは

ふけにつつさぬる夜のとしのまれらにただひとよのみ」（人丸集・八八）、「山たかみふりくるきりにむすばれてなくうぐひすのこゑまれらなり」（赤人集・一）、「うぐひすもときならねばぞなくこゑはいまはまれらになりぬべらなる」（赤人集・五一）といった平安期成立の万葉歌人の私家集に見出される。また、「鶯はときならねばや鳴く声のいまはまれらに成りぬべらなる」（千里集・二八・鶯語渋漸稀）、「山ざともまれらなりけりほととぎすまてどもなかぬこゑをきくかな」（中務集・四・やまざとにほととぎすなく）、「いはのうへの松にたとへむきみぎみは世にまれらなるたねぞとおもへば」（拾遺集・雑賀・一一六五・左大臣・冷泉院の五六のみこはかまぎ侍りけるころ、いひおこせて侍りける）などの例がある。「人めまれら（に）」の用例は、当該歌以外、未だ管見に入らないが、「人目」が「まれ」であるという表現は、「をちこちの人めまれなる山里に家ゐせんとは思ひきや君」（後撰集・雑二・一一七二・むかしおなじ所に宮づかへし侍りける女の、をとこにつきて人のくににおちゐたりけるをききつけて、心ありける人なれば、いひつかはしける）、「しぐれつつ人めまれなるわがやどはこのはのちるをたれかとぞおもふ」（好忠集・二八〇・はじめの冬　十月）、「さととほみひとめまれなるをやまだはいなばのつゆのもるにぞありける」（四条宮下野集・七五・やまだ）などの歌に見出される。

「しら雲」「ふか（く）」という表現は、「かぎりとて野べのはるけくみえゆけば立つしら雲もふかくぞありける」（千里集・九〇・野曠白雲浮）、「と山だにかかりけるをとしらくものふかき心はしるもしらぬも」（蜻蛉日記・中・一七五・修行者）があるが、平安中期までの用例はそれほど多くない。

「山ちさ」の和歌に詠まれた例は、『万葉集』に「息の緒に思へる我を山ぢさの花にか君がうつろひぬらむ」（巻七・一三六四・一三六〇・花に寄する）、「山ぢさの白露重みうらぶれて心に深く我が恋止まず」（巻十一・二四七三・二四六九）の二首が見えるが、平安期に入ると、わずかに「いたづらにちりやしぬらむ山たかみ人もかよはぬ山ぢさの花」（近江御息所歌合・一二・山ぢさの花）を見出すのみである。いずれも萎れやすく散りやすい花の性質に着目するが、当該歌は、「山ちさ」がその花の白さによって「白雲」に隠れて人知れず咲くさまを詠んでいる点で一線を画す。

なお、後世、『新撰六帖』では、第六帖「やまちさ」題として、「あしびきの山ちさの花露かけてさける色これ我見はやさん」（二五二六・家良）、「さくとだにたれかはしらんしらくものはれせぬ山のやまちさのはな」（二五二七・為家）、「こがくれのひかげもおそきやまちさは花のうへなる露ぞ久しき」（二五二八・知家）、「としくるるつま木にまじる山ちさのただひと枝はうなゐ

子がため」（二五二九・信実）、「夜はにおくしら露おもみ山ちさのはなもやさけばかぜをまつらん」（二五三〇・光俊）の五首の歌が詠まれた。「白雲」とともに詠んだ為家の歌は、『古今六帖』の当該歌を念頭に置いた詠か。

附記

本稿は、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究」（同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号16K00469、二〇一六～二〇一八年度）の一部である。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版Ver.2とともに、竹田正幸氏（九州大学大学院システム情報科学研究院）作成の文字列解析器〝e-CSA Ver.2.00〟を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・肥前島原 松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げる。

『古今和歌六帖』別出歌一覧 ―第六帖、4261～4328番―

4261 しひ

かたをかのむかひのみねにしひまくはことしの夏のかげにせんかも（人丸）

2－1万葉1103［このむかつをに］［しひまかば］［かげにならむか］

4262

おとはせん君をばまたんむかへをのしひの（以下欠）

2－1万葉3514［おそはやも］［きみをしまたむ］［むかつをの］［しひのさえだの］［ときはすぐとも］

4263

我がやどにきみこししひのなかたえてつみのむくひやあひみざるらん

〈未詳〉

4264 ざくろ

あしひきの山ざくろさくやみねこえしかまつきみかはいはひ待つかも

2－1万葉1267［やまつばきさく］［やつをこえ］［ししまつきみが］［いはひつまかも］

4265 なし

をふのうらにかたえさしおほひなるなしのなりもならずもねてかたらはん

1－1古今1099

4266

紅葉ばのにほひはしげししかはあれどまつなしの木ををりてか

ざさん

4267 2－1万葉2192［しかれども］［つまなしのきを］［たをりかざさむ］

つゆじものさむきゆふべにたえかねてうつろひにけりつまなしの木は

2－1万葉2193［さむきゆふへの］［あきかぜに］［もみちにけらし］

山なし

4268 よのなかをうしといひてもいづこにか身をばかくさん山なしの花

5－20近江合15［いづくにか］

もも

4269 我がやどのけもものしたのつきよさしした心よしうたて此比

2－1万葉1893［けもものしたに］［つくよさし］

4270 はしきやしわが家のけももとししげみなにのみ咲きてならざらめやも

2－1万葉1362［わぎへのけもも］［もとしげく］［はなのみさきて］［ならずあらめやも］

4271 はるのそのくれなゐにほふもものはなしたてるみちにいでたてるいも

3－3家持35［いでたてるいも］、2－1万葉4163［いでたつをとめ］、3－3家持34［はるのいへの］［はなのなたてに］［いでゐたるいも］

すもも

4272 我がそののすもものはなかにはにちるはだれのいまだ残りたるかも（やかもち）

2－1万葉4164［のこりてあるかも］

4273 今いくか春しなければ鶯も物はながめておもふべらなり

1－1古今428

からもも

4274 あふからも物はなほこそかなしけれわかれんことをかねておもへば（ふかやぶ）

1－1古今429、3－39深養父5［物は先こそ］

くるみ

4275 うぐひすにはなしられけばなけれどもはるくるみちの物にぞ有りける（つらゆき）

3－19貫之882［みえねども］［秋くる道の］［ものにざりける］

すぎ

4276 我がいほはみわのやまもとこひしくはとふとふきませ杉たてるかど

1－1古今982［とぶらひきませ］、2－3新撰和316［我が宿は］［とぶらひきませ］

4277 いづれをかしるべともせん三輪の山みえとみゆるはすぎにざりける（つらゆき）

3－19貫之145［しるしと思はん］、1－3拾遺抄471［しるしとお

もはむ］［ありとし有るは］、1－3拾遺集1266［しるしとおもはむ］［有りとしあるは］［すぎにぞありける］

4278 わすれずはたづねもしてんみわの山しるしにうゑし杉はなくとも

〈未詳〉

4279 いそのかみふるの神杉かみさびて我やさらさらこひにあひにける

2－1万葉1931［かむびにし］、3－2赤人208［ふるのやしろの］［すぎにしを］［われらさらさら］［こひにあひにけり］

4280 神なびのかみのよりいたにする杉のおもひもすぎずこひのしげきに（人丸）

2－1万葉1777［かみよせいたに］

4281 我がせこを都へやりてまちしたひあしがら山のすぎの木の間か

2－1万葉3380［やまとへやりて］［まつしだす］

むろ

4282 いはやとにねはふむろの木なれみればむかしの人をあひみるがごと

2－1万葉312［たてるまつのき］［なをみれば］［あひみるごとし］

4283 はなれいそにたてるむろの木うたかたもひさしき時を過ぎにけらしも

2－1万葉3622［はなれそに］［すぎにけるかも］

まき

4284 うちなびきはるさりくらし山のべのまきのこずゑのさき行くみれば

2－1万葉1869［うちなびく］［やまのまの］［とほきこぬれの］、2－1万葉1426［うちなびく］［はるきたるらし］［やまのまの］［とほきこぬれの］、3－2赤人156［はるたちぬらし］［山もとの］［わがよのすゑに］［さきちるみれば］

4285 ちどり鳴くさほのかはぎり立ちぬらしまきのこずゑも色づきにけり（ただみね）

3－3家持241［みねのこずゑも］［いろかはりゆく］、1－1古今361［山のこのはも］［色まさりゆく］、1－3拾遺集186［山のこのはも］［色かはり行く］、7－6忠岑68［やまのこのはも］［いろまさりゆく］、3－13忠岑181［山のこのはの］［いろかはりゆく］、3－3家持267［山のもみぢば］［いろかはりゆく］、5－5寛平中19［嶺の紅葉の］［色まさりけり］

4286 あたへ行くをしほの山のまきのはもひさしくみればこけおひにけり

2－1万葉1204［あてへゆく］［をすてのやまの］［ひさしくみねば］［こけむしにけり］

かつら

4287 はるがすみたなびきにけり久かたの月のかつらもいまやさくらん

1－2後撰18［花やさくらむ］

4288 目にはみててにはとられぬ月の内のかつらのごときいもにもあ

るかな
5－415伊勢語133［君にぞありける］、2－1万葉635［てにはとらえぬ］［いもをいかにせむ］

4289 かふくわの木
ひるはさきよるはこひぬるかふくわの木きみのみみむやわけさへにみよ
2－1万葉1465［ねぶのはな］［きみのみみめや］

4290 わぎもこがかたみのかふくわはなにのみさきてけだしもみにならぬかも
2－1万葉1467［かたみのねぶは］［はなのみに］［さきてけだしく］［みにならじかも］

4291 あふち
我がやどにあふちのはなはさきたれどなにしもおはぬ物にぞ有りける（つらゆき）
〈未詳〉

4292 さみだれにこひすといふなはたたばたて君にあふちの花し咲きなば
〈未詳〉

4293 さみだれとことなしびつる時しもぞ人にあふちの花は咲きける
〈未詳〉

4294 わぎもこにあふちのはなは散過ぎていまいまさけることあらんいもかも
2－1万葉1977［ちりすぎず］［いまさけるごと］［ありこせぬかも］、3－2赤人248［ちりにけり］［きていもさける］［ことありとかきく］

4295 かし
あしひきの山におひたるしらがしのしらじな人をくちきなりとも
1－2後撰1084、7－5躬恒327［しらじや人を］［くちきなりなん］

4296 しらがしの雪もきえにしあしひきのやま路をたれかふみまどふべき
1－2後撰1206、3－26朝忠2［ゆきもたえにし］、3－18敦忠134［ゆきかきこえて］

4297 くぬぎ
さほ川のきしに生ひたるわかくぬぎそれなかりそね有りつつも君がきまさばたちかくるがね

4298 つばき
あなし山つばき咲きたるやへをこえしかまつ君がいはひづまかも
2－1万葉1267［あしひきの］［やまつばきさく］［やつをこえ］［ししまつきみが］

4299 かはかみのつらつらつばきつらつらに見れどもあかずこせのはるのは
2－1万葉56［かはのへの］、2－1万葉54［こせやまの］［み

4300 つつしのはな［こせのはるのを］
おく山の八重をのつばきつばらかにけふはくらさねますらをの友（やかもち）
2－1万葉4176［やつをのつばき］

4301 あしひきのやへらのつばきつらつらにみともあかめやうゑてけるきみ（おなじ）
2－1万葉4505［やつをのつばき］

かしは

4302 いなびののあからがしはのときはあれどきみにこひせぬときはさねなし
2－1万葉4325［いなみのの］［あからがしはは］［きみをあがもふ］

4303 ならやまのこのてがしはのふたおもてとにもかくにもねぢけ人かも
2－1万葉3858［ふたおもに］［かにもかくにも］［こびひとがとも］

4304 いそのかみふるからをののもとがしはもとの心はわすられなくに
1－1古今886、6－3継色紙26

ほほがしは

4305 わがせこがささげてもたるほほがしはあだにもにるかあをきかさには
2－1万葉4228［ささげてもてる］［あたかもにるか］［あをききぬがさ］

4306 すべらぎのとほにみよみよはやふせりさけのむといふぞこのほほがしは
2－1万葉4229［すめろきの］［とほみよみよは］［いしきをり］［きのみきといふぞ］

ながめがしは

4307 人こふるながめがしははふるさとのうきねにのみぞしげくみえける

〈未詳〉

つつじ

4308 玉もかるおほくのうらのうら風につつじのはなはちりぬらんかも

〈未詳〉

4309 ほそひれのさぎさかやまのしらつつじ我ににほはせいもにしめさん（人丸）
2－1万葉1698［たくひれの］［われにほはに］

いはつつじ

4310 たきばしるをしひのやまのいはつつじいはまを分けていやめづらしに

〈未詳〉

4311 やまこえてとほつのはまのいはつつじ我がくるまくにふふみてありまて

4312
2－1万葉1192［わがくるまでに］
たねしあればおひにけらしないはつつじ花さくはるにあはんとやみし
3－12躬恒424［おひにけらしも］［あはれとやみし］、7－5躬恒74［たねあれば］［おひにけらしも］

ひさぎ

4313
なみまよりみゆるこじまのはまひさぎひさしく成りぬいもにあはずて
1－3拾遺集856［君にあはずて］、2－1万葉2763［なみのまゆ］［きみにあはずして］、5－415伊勢語197［はまびさし］［君にあひ見で］

4314
こぞさきしひさぎ今さらいたづらにつちにやおちんみる人なしに
2－1万葉1867［ひさぎいまさく］［つちにかおちむ］、3－2赤人168［くさきいまさく］［つちにやちらん］［みぬ人なしに］

くは

4315
たらちねのおやのそのふのくはもなほねがへばきぬにつくといふものを
2－1万葉1361［ははがそのなる］［くはすらに］［きるといふものを］

4316
ひきまゆのかくふたごもりせまほしみくはこきたれてなくをみせばや
1－2後撰874

はたつもり

4317
わがこひはみやまにおふるはたつもりつもりにけらしあふよしもなし

〈未詳〉

しきみ

4318
おく山のしきみのはなのなのごとやしらしら君にこひわたりなん
2－1万葉4500［しきみがはなの］［しくしくきみに］

あせみ

4319
かはづ鳴くよし野のかはのたきの上のあせみの花ぞてなふれそゆめ
2－1万葉1872［あしびのはなぞ］［はしにおくなゆめ］、3－2赤人158［たきのうへに］［あさざのはなぞ］［さきてあだなる］

4320
我がせこにわがこふらくはおくやまのあせみのはなの今さかりなり
3－2赤人186［わがせこを］、2－1万葉1907［あがこふらくは］［あしびのはなの］、3－3家持37［なほこふらくは］［おくやまに］［つつじのけふは］［さかりなりけり］

4321
はるやまのあせみのはなのにくからぬ君にはしゑやよりぬともよし
2－1万葉1930［あしびのはなの］［あしからぬ］［よそるともよし］、3－2赤人207［あせみのはなに］［きみにはしめよ］［よが

れはこひし]

4322 山ちさ

いきのをにおひつる我を山ちさのはなにか君がうつろひにけん

2－1万葉1364［おもへるわれを］［うつろひぬらむ］

4323 やまちさのしら露おもみうらぶれてこころにふかき我がこひやまず

2－1万葉2473［こころもふかく］［あがこひやまず］

4324 わがごとく人めまれらにおもふらししら雲ふかくやまちさの花

〈未詳〉

4325 ゆづるは

あどおもへかあじくまやまのゆづる葉のふくまるときに風ふかずかも

2－1万葉3594［あどもへか］［ふふまるときに］

4326 かたかし

もののふのやそをとめらがふみとよむてらゐのうへのかたかしのはな（やかもち）

2－1万葉4167［くみまがふ］［かたかごのはな］

4327 つまま

岩のうへのつままをみればねをはひてとしふかくらしかみさびにけり（おなじ）

2－1万葉4183［いそのうへの］［ねをはへて］［としふかくあらし］［かむさびにけり］

4328 さねき

あをやぎのさねきのはなはいまもかも君みだるらん見る人なしに（おなじ）

3－2赤人157［あの山の］［さくらのはなは］［けふもかも］［ちりみだるらん］、2－1万葉1871［あほやまの］［さくらのはなは］［けふもかも］［ちりまがふらむ］